

第四章 中の君の物語 匂宮と中の君、朝ぼらけの宇治川を見る

[第一段 明石中宮、匂宮の外出を諫める]

宮は(匂兵部卿宮は)、*その夜(その三日目の夜に)、内裏に参りたまひて(参内なさったまま)、えまかでたまふまじげなるを(退出し難くなっているのを)、人知れず御心も空にて思し嘆きたるに(内心で気が気でなく気を揉んでいらっしゃるが)、中宮(中宮の母君は)、 *「そのようちにまゐりたまひて」は、私は勝手に、匂宮はこの日は宇治に留まっている、と思ひ込んでいたので意外だったが、兵部卿が御所に出仕するのは当たり前前の日常ではあるのかもしれない。

「なほ、かく独りおはしまして(未だにこのように独身でいらっしゃって)、世の中に、好いたまへる御名のやうやう聞こゆる(世間に好色者の御名を轟かすとは)、なほ、いと悪しきことなり(いよいよ以て感心しません)。何事ももの好ましく(とにかく人一倍に)、立てたる御心なつかひたまひそ(際立った言動をお遣りなさいますな)。*上もうしろめたげに思しのたまふ(主上も心配そうに思い仰います)」 *「うへも」は注に<主上も。詞の中での中宮が帝を呼ぶ呼称。私的な呼称。>とある。

と、里住みがちにおはしますを諫めきこえたまへば(と匂宮が気ままな六条院住まいをしがちでいらっしゃるのを戒め申しなさるので)、いと苦しと思して(まことに気まずく思いなさって)、御宿直所に出でたまひて(御所内の自室に下がりなさって)、*御文書きてたてまつれたまへる名残も(宇治姫に今夜は参上なされないお断りの御手紙を差し上げなされた後でも)、いたくうち眺めておはしますに(とても残念に気落ちしていらっしゃる所に)、中納言の君参りたまへり(中納言の薫君がお見えになりました)。 *「御文書きてたてまつれたまへる名残も」は注に<『集成』は「宇治へのお便り。今夜は行けない嘆きを書き送る」と注す。>とある。

そなたの心寄せと思せば(匂宮は薫君を母中宮から諫められた側の同調者とお思いになると)、例よりもうれしくて(いつもよりその来訪が嬉しくて)、

「いかがすべき(どうしたものか)。いとかく暗くなりぬめるを(もうこんなに暗くなってしまって)、心も乱れてなむ(宇治へ出向けずに、落ち着かない)」

と、嘆かしげに思したり(と嘆かわしくしているように見えなさいました)。よく御けしきを見たてまつらむと思して(しかし薫君は、更に匂宮の御意向を見極め申そうとお思いになって)、

「日ごろ経て(久しぶりに)、かく参りたまへるを(あなた様がこうして参内なされたのに)、今宵さぶらはせたまはで(お泊まりなさらずに)、急ぎまかでたまひなむ(急ぎ退出なさっては)、いとどよろしからぬことにや思しきこえさせたまはむ(中宮様はますます心証を悪くなさるでしょう)。台盤所の方にて承りつれば(台所の方で中宮様のお話を承っております)、人知れず(私は内心で)、わづらはしき宮仕へのしるしに(あなた様に余計な手引きをお仕え申しました所為で)、あいなき勘当にやはべらむと(とぼっちりの御不興を買いやせぬかと)、顔の色違ひはべりつる(顔が青くなりました)」

と申したまへば、

「いと聞きにくくぞ思しのたまふや(全部私が悪いかの仰りようですね)。多くは人のとりなすことなるべし(母上には、誰かが変な風に告げ口したんでしょうよ)。世に咎めあるばかりの心は(何も非難されるような不誠実は)、何事にかは、つかふらむ(決してしないのに)。所狭き身のほどこそ(むしろこの窮屈な立場の所為で、今夜宇治へ行かれないことこそ)、なかなかなるわざなりけれ(却って不誠実になるではないか)」

とて(と言って匂宮は)、まことに厭はしくさへ思したり(本当に忌々しいほどに御思いでした)。

いとほしく見たてまつりたまひて(薫君は気の毒に思い申しなさって)、

「同じ*御騒がれにこそはおはすなれ(どうせ中宮様の御懸念は晴れますまい)。 *「おおんさはがれ」は<中宮の胸騒ぎ>らしい。「同じ」は、匂宮が今夜宇治へ出かけようと御所に留まろうと、中宮の懸念に<変わりはない>ということのようだが、それは下文を読み進んではっきりすることで、此处で「同じ」と切り出した時点では、その内容までは示していないのだから、この一文は中宮の懸念を言う論旨よりは、むしろそれに関わらずに決断を促す励ましないしそそのかし自体を主眼とした威勢の良い言い方なのだろう。

*今宵の罪には代はりきこえて(今宵の御前の不始末は引き受け申して)、身をもいたづらになしはべりなむかし(私が姉上に叱られておこう)。 *「こよひのつみ」は、匂宮が謹慎せずに宇治へ出かけてしまうこと、なのだろうが、「罪」に「御」の敬称がない。薫君は、此处では宮様に対する臣下の立場ではなく、叔父の立場で甥を庇ってやる、という言い方のようだ。非常に濃密な人間関係を示す文なのだろう。

*木幡の山に馬はいかがはべるべき(山科路に馬を使うのは考えものですな)。いとどものの間こえや障り所なからむ(ますます噂が立つのを防ぎようもないでしょうよ)」 *「こはたのやまにむまは」は注に<『源氏釈』は「山科の木幡の里に馬はあれどちよりぞ来る君を思へば」(拾遺集雑恋、一二四三、人麿)を指摘。>とある。この引歌は椎本卷三章三段にも引かれていて、楽しみを長く味わいたくて急ぎ馬ではなく徒歩で会いに来た、みたいなことと思って置くが、私には良く分からない歌だ。ただ此处では、馬で急げば間に合うぞ、と言っているのは明らかだ。

と聞こえたまへば(とお聞かせ申しなさると)、ただ暮れに暮れて更けにける夜なれば(もうすっかり日が暮れて深まった夜なので)、思しわびて(匂宮は止む無く)、御馬にて出でたまひぬ(御馬でお出掛けなさいました)。

「御供には、なかなか仕うまつらじ(御供はあえて仕りません)。御後見を(後はお任せください)」

とて、この君は内裏にさぶらひたまふ(と言って薫君は御所に残りなさいます)。

[第二段 薫、明石中宮に対面]

中宮の御方に参りたまひつれば(薫君が中宮の御部屋に参上なさいますと)、

「宮は出でたまひぬなり(三の宮はお出掛けなされたのですね)。あさましくいとほしき御さまかな(情けなく困ったことですね)。いかに人見たてまつらむ(世間が何と申し上げることか)。上聞こし召しては(帝がお聞きになれば)、諫めきこえぬが言ふかひなき(私の仕付けが成っていないからだ)、と思しのたまふこそわりなけれ(と仰せになるに決まっています)」

とのたまふ(と中宮は仰います)。*あまた宮たちの(多くの皇子たちが)、かくおとなび整ひたまへど(それぞれ成人なされたが)、*大宮は(その母上である中宮は)、いよいよ若くをかしきはひなむ、まさりたまひける(いよいよ若々しく美しさが増していらっしゃいます)。*「あまたのみやたち」は注に<明石中宮腹の宮たち。東宮(一の宮)、二の宮、三の宮(匂宮)、五の宮、女一の宮たちがいる。>とある。*「おほみや」は注に<明石中宮をいう。四十三歳である。>とある。明石姫もいよいよ次世代に後進を譲る年齢になったようだ。それなりに感慨深い。

「*女一の宮も、かくぞおはしますべかめる(女一の宮もこの中宮に似ていらっしゃるのだろう)。いかならむ折に(いつか)、かばかりにてももの近く(僅かな間でも側近くで)、御声をだに聞きたてまつらむ(御声だけでもお聞き申したい)」と、あはれとおぼゆ(と薫君は興味深く思えます)。*「女一の宮」は六条院春の町の東の対に住んでいるはずだ。若菜下巻三章一段に「春宮の御さしつぎの女一の宮を(皇太子のすぐ下の女一の宮を)、こなたに取り分きてかしづきたてまつりたまふ(紫上は東の対に引き取って大切に御養育なさいます)」という記事があって、同巻三章五段には「御子二所おはするを(みこふたところおはするを、女御は御子が二人いらしたが)、またもけしきばみたまひて(また御懐妊なさて)、五月(いつつき、五ヶ月)ばかりにぞなりたまへれば(ほどにお成りだったので)、神事などにことづけておはしますなりけり(神事の穢れ払いを理由立てて十二月初めに御所から退出していらしたのです)」とあったことから、春宮が明石中宮 13 歳の三月に産んだ子であり、「またもけしきばみたまひて」は明石中宮 18 歳のことで、翌年の 19 歳の夏に産んだのが匂宮らしいので、春宮と三の宮が 6 歳違いで、その間に二の宮と女一の宮がいて、女一の宮が第二子であつたらしいと知れる。で、本年でざっと、今上帝 45 歳、中宮 43 歳、皇太子 31 歳、匂三の宮 25 歳、で、二の宮 27 歳、女一の宮 29 歳、あたりになるかと思う。なお、薫君 24 歳、宇治姉君 26 歳、妹君 24 歳。

「好いたる人の(女に恋した男が)、*おぼゆまじき*心つかふらむも(似付かわぬ乱暴を働くのも)、かうやうなる*御仲らひの(このような御血縁の間柄で)、さすがに気遠からず入り立ちて(それだけに親しく出入りするものの)、心になはぬ折のことならむかし(思うように男女の仲になれない時の事なのだろう)。*「おぼゆ」は<自然に思われる=それらしく見える=似つかわしい>。「おぼゆまじき」は<それらしくない=似付かわない>。*「こころつかふ」は<心に任せる=気ままに振舞う=乱暴に及ぶ>。*「なからひ」は<血縁>。「御(おおん)」は王家への敬称。

わが心のやうに(私の考えのように)、*ひがひがしき心のたぐひやは(結婚願望が無いひねくれ者は)、また世にあんべかめる(他には居ないだろう)。それに(そんな私が)、なほ動きそめぬるあたりは(それでも心を動かした相手の宇治姉君は)、えこそ思ひ絶えね(とても思い切れはしない)」*「ひがひがし」は<偏屈だ、偏狭だ>という悪評で<意志が堅くて頼りになる>みたいな良い意味合いは無いようだ。注には、此処の文意を<『集成』は「身近に大君や中の君に会いながら、手を出さなかったことを言う」と注す。>としてあるが、薫君は手出ししないことを自制が利いていると自負していて、だらしない、なさけない、などといった負い目を感じていないので、この「ひがひがし」は出生事情にこだわって結婚願望が無いという<屈折した心理>を言っている、かと思う。

など思ひみたまへる(などと薫君は思っいらっしやいました)。

さぶらふ限りの女房の容貌心ざま(薫君にお仕えしているすべての女房の容姿や気立てが)、いづれとなく悪ろびたるなく(誰と言って劣ることなく)、めやすくとりどりにをかしきなかに(好ましくそれぞれに美しい中でも)、あてにすぐれて目にとまるあれど(身分が高く目立つ者も居るが)、さらにさらに乱れそめじの心にて(決して一向に心を奪われまいという気構えで)、いときすくにもてなしたまへり(薫中納言はとても生真面目に対応なさっていました)。

ことさらに*見えしらがふ人もあり(特に目立とうとする女房も居ました)。*「見えしらがふ」は、「見ゆ(見える、示す)」の連用形+「しらがふ(わざとそうするようにする)」の連体形で<わざと見えるようにする=目立とうとする>。

*おほかた恥づかしげに(薫君は大体が立派に)、もてしづめたまへるあたりなれば(落ち着いた態度でいらっしやるので)、上べこそ心ばかりもてしづめたれ(女房たちは上辺は形こそ控え目だが)、心々なる世の中なりければ(思いは様々な女の世界なので)、色めかしげにすすみたる下の心漏りて見ゆるもあるを(薫君を色事に垂らし込もうという下心が見え透く者も居るが)、「さまざまにをかしくも(それぞれに興味深くも)、あはれにもあるかな(感じ入りもする)」と、*立ちてもゐても(ソワソワと気をそそられるが)、*ただ常なきありさまを思ひありきたまふ(結局は薫君は思い定まらず、世の無常を思っいらっしやるばかりなのです)。*「おほかた恥づかしげにもてしづめたまへるあたり」とは、話題の主である薫君のことを言っているのだろうが、こういう言い回しをする意図が特に有るのか、軽口調なのか、とにかく分かり難い。また、この「恥づかしげ」は女房たちから見て<自分たちが気後れするほど相手が整然としている=立派だ>という語用らしい。是も分かり難い。*「立ちてもゐても」は歌語。と注にある。で、ウェブ検索すると「立ちて居てたどきも知らず吾が心天つ空なり土は踏めども」(万葉集、巻12、2887)がヒットする。「たどき」は<手立て、方法>。「立ちて居てたどきも知らず」は<立ったり座ったりソワソワして、どうして良いか分からない>。「吾が心天つ空なり土は踏めども(あがこころ あまつそらなり つちはふめども)」は<私の心は空に浮く、足は地面に付いているのに>。恋に上気する生理は古今東西に変わり無さそうで、この手の素直な歌詠みには普遍性がある。さて、「立ちて居て」は気もそぞろな恋心のようなのだが、「立ちても居ても」の「も」は逆接の接続助詞だから<立ったり座ったり目移りするが>と、その場の相手にはするようだが、結婚までは考えない、という文意になりそう。妙に分かり難い文だが、同様の趣旨は句兵部卿巻二章五段にも語られていたので、一応そういう文意と取って置く。*「ただ~ありく」は<~だけし続ける=~ばかりしている>。

[第三段 女房たちと大君の思い]

かしこには(宇治にあっては)、中納言殿のことことしげに言ひなしたまへりつるを(中納言殿が凝った仕掛けで三日夜を大層に祝い事に言い做しなさいたものを)、夜更くるまでおはしまさで(兵部卿宮は夜更けまでお見えにならず)、御文のあるを(今日はお越しになれない旨の御手紙があるのを)、「さればよ(やはり本気ではないのだ)」と胸つぶれておはするに(と落胆していらっしやる所に)、夜中近くなりて、荒ましき風のきほひに(夜中近くになって木幡山の激しい下ろし風の勢いに乗って)、いともなまめかしくきよらにて句ひおはしたるも(何とも雅で美しい姿で句宮がお見えになったのも)、いかがおろかにおぼえたまはむ(どうしてつまらない事に思えなされましようか)。

正身も(新妻本人の妹君も)、いささかうちなびきて(いくらか感じ入って)、思ひ知りたまふことあるべし(兵部卿宮の誠意を思い知りなされたに違いない)。いみじくをかしげに盛りと見えて(妹君は非常に情緒ある女盛りに見えて)、引きつくろひたまへるさまは(身繕いを整えていらっしやる姿は)、「ましてたぐひあらじはや(これ以上の女はいないだろう)」とおぼゆ(と思えます)。

さばかりよき人を多く見たまふ御目にだに(相当に美しい女を多く見ていらっしやる匂宮の目にさえ)、けしうはあらずと(妹君は非の打ち所がないと)、容貌よりはじめて(見た目をはじめ)、多く近まさりしたりと思さるれば(所作物腰などの多くに、近寄って実際に見知るほど素晴らしいとお思いのようなので)、山里の老い人どもは、まして口つき憎げにうち笑みつつ(山里の老女たちは増長して思惑通りと含み笑いをしつつ)、

「かくあたらしき御ありさまを(このような勿体無い姫君の御身を)、なのめなる際の人に見たてまつりたまはましかば(並の身分の者が娶り申し上げなされたなら)、いかに口惜しからまし(どんなに残念だったでしょう)」

思ふやうなる御宿世と聞こえつつ(などこの兵部卿宮との御結婚で妹君は理想的な御縁に恵まれなされたと申しては)、姫宮の御心を(中納言殿を避けなされる姉君の御考えを)、あやしくひがひがしくもてなしたまふを(変に意固地に対応なされると)、もどき口ひそみきこゆ(あげつらって困ったことと申します)。

盛り過ぎたるさまどもに(盛りを過ぎた老体に)、あざやかなる花の色々、似つかはしからぬをさし縫ひつつ(鮮やかな花の色々の年不相応な服を仕立てて)、ありつかずとりつくろひたる姿ども(似合わないまま着飾っている古女房たちの)、罪許されたるもなきを見わたされたまひて(見ともない姿を見渡しなされて)、姫宮(姉君は)、

「我もやうやう盛り過ぎぬる身ぞかし(私もそろそろ盛りを過ぎた年齢だ)。鏡を見れば、痩せ痩せになりもてゆく(鏡を見ればだんだん痩せてみすぼらしい)。おのがじしは(各自では)、この人どもも(この女房たちも)、我悪しとやは思へる(自身を衰えたとは思っていないで)、*うしろでは知らず顔に(自分の後姿を知らないで)、額髪をひきかけつつ(額髪を若ぶって掻き揚げては)、色どりたる顔づくりをよくしてうち振る舞ふめり(風情めかした表情で機嫌よく振舞っているようだ)。わが身にては、まだいとあれがほどにはあらず(私はあそこまでは老いぼれていないのだから)、目も鼻も*直しとおぼゆるは(目も鼻も普通だと思ふのは)、*心のなしにやあらむ(勝手な思い込みだろうか) *「後ろ手」は<後ろ側、後姿>。 *「直(なほ)」は<普通>という名詞。「し」はその形容語。 *「こころのなし」は<思いなし=思い込み>。

とうしろめたくて(と気弱になって)、*見出だして臥したまへり(庭を見遣って、横に成りなさいました)。 *「見いだす」は<中から外を見る>と古語辞典にある。

「*恥づかしげならむ人に見えむことは(立派な中納言殿と結婚するのは)、いよいよかたはらいたく(いよいよ不釣合いで)、今一二年あらば、衰へまさりなむ(あと一、二年したら、もっと衰えてしまうだろう)。はかなげなる身のありさまを(情けないこの身の上よ)」と(と姉君は)、御手つきの細やかにか弱く(御自分の腕が細くてか弱く)、あはれなるをさし出でて(頼りない

のを袖から出して御覧になつては、世の中を思ひ続けたまふ(人生を考えなさいます)。*「恥づかしげ」は薫中納言の形容に良く使われるが、ただ堅苦しく気真面目というのは薫君の実態に沿わない気がするし、かといって威風堂々とした貫禄があるというわけでもなさそうで、何となく<ツンと澄ましている>みたいな語感があるような気がするが、言い換えとしてはやはり<立派>として置く。

[第四段 匂宮と中の君、朝ぼらけの宇治川を見る]

宮は、ありがたかりつる御暇のほどを思しめぐらすに(匂宮は母宮に制されて大変に困難だった御退出のことをお考えになると)、「なほ、心やすかるまじきことにこそは(とても気安くは宇治通い出来ない)」と、胸ふたがりておぼえたまひけり(と暗い気分になりなさいます)。「宮」は<匂宮>と注にある。つまり、姉君や妹君や、更には中宮なども前段に登場し、それらをも作者が<宮>と呼称して来ているので紛らわしく、校訂者があえて注記した、ということなのだろう。文脈や文意から推して、この「宮」が兵部卿宮であることは殊更に難解というわけではないが、少し読み進んでから推さなければ主語・述語・目的語などを確認できないほどの紛らわしさは確かにある。ただ、それは別に此処に限らず、このような描き方はこの物語では普通で、だから、作者の基本的な作文姿勢が事態の推移を説明する情熱に薄く、場面描写に興味を持つという、その意味では、戦略や戦術性に於いて世情を見る男目線ではなく、その場の其処に居る人の反応そのものに人の生き方としての世情を見る女目線の性格が良く出ている、と思えなくもない。だから仮に是が、映画や演劇で舞台や衣装が闇の場面として具体提示された上での語りの文だとすれば、文意自体も分かり易いだろうし、その文意を語る作意も説得力が有るのかも知れない。しかし実際には、現に是が私にとって分かり難い文であることは紛れも無い事実だ。ただし、この作者は時代性(歴史的意味ではなく、大陸の先進技術導入によって増大する主に農業の生産性向上の喜ばしさと、それによって如実に変革変容する国家や社会構造機構の実感)を相当に強く意識しているようだし、そうでなければ、物語の構想も構成もできないだろう。

大宮の聞こえたまひしさまなど語りきこえたまひて(匂兵部卿宮は、母宮が自分に皇子の自覚を持ってふらふらと遠出なさいませぬようと、制し申しなさったことを妹姫に話し聞かせなさて)、

「思ひながらとだえあらむを(あなたを思っていながら私が来れない事があっても)、いかなるにか、と思すな(何と冷たいとは思いなさいますな)。夢にてもおろかならむに(もしあなたを軽く考えていたら)、かくまでも参り来まじきを(こうまでして参りませんのですから)。心のほどやいかがと疑ひて(今夜はさすがに第三夜なので参じなければ、あなたが私の誠意を疑って)、思ひ乱れたまはむが心苦しさに(悲しみなさるのが心苦しくて)、*身を捨ててなむ(立場を顧みず遣って来ました)。*「身を捨ててなむ」は注に<係助詞「なむ」の下に「参りつる」などの語句が省略。>とある。従う。

常にかくはえ*惑ひありかじ(いつもこのように慌しくは出来ません)。さるべきさまにて(しかるべき家を用意して)、近く渡したてまつらむ(近くにお移し申そう)」 *「まどふ」は<判断に迷う、取り乱す、うろたえる、あわてる>などと大辞泉にある。

と、いと深く聞こえたまへど(と深く思い遣って申しなさったが)、「絶え間あるべく思さるらむは(今後途絶えがあるようにお考えなのは)、音に聞きし御心のほどしるべきにや(評判通り

の浮気性のほどを知るべきなのだろうか」と心おかれて(と妹姫は懸念されて)、わが御ありさまから(没落貴族の山育ちという御自分の事情から、どうしても控え目にものを考えがちで)、さまざまの嘆かしくてなむありける(いろいろと悲しくなるのでした)。

明け行くほどの空に、妻戸押し開けたまひて(明け白む空に妻戸を押し開けなさって)、もろともに誘ひ出でて見たまへば(匂宮は姫を誘ってともどもに縁側に出て御覧になると)、霧りわたれるさま、所からのあはれ多く添ひて(朝霧が立ち込めて山里らしく秋の風情が濃く)、例の(例によって)、*柴積む舟のかすかに行き交ふ跡の白波(柴を積んだ舟がわずかに行き交う跡の宇治川の白波が)、「目馴れずもある住まひのさまかな(珍しい景色だ)」と、*色なる御心には、をかしく思しなさる(と女を得た充実した気分で情緒に耽りなさります)。*「柴積む舟のかすかに行き交ふ跡の白波」は注に<『完訳』は「以下宇治の典型的風景」と注す。『源氏積』は「世の中を何に譬へむ朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の白波」(拾遺集哀傷、一三二七、沙弥満誓)を指摘。>とある。「哀傷」というのは死別を意味するのだろうか。何れ「跡の白波」は<余韻>だろうし、此处では<情事の余韻>で、「例の」はとても思わせぶりだ。*「いろなるみこころ」は<情事の余韻>の満足感を示す言い方なのだろう。

山の端の光やうやう見ゆるに(山の端から日の光が次第に差し込むと)、女君の御容貌のまほにうつくしげにて(女君の御顔立ちが整って美しく)、「*限りなくいつき据ゑたらむ姫宮も(この上なく大事にされているはずの姉宮も)、かばかりこそはおはすべかめれ(このように美しくはいらっしゃるだろうが)、*思ひなしの(今上の内親王という思い込みで)、*わが方さまのいといつくしきぞかし(女一の宮の方が立派に見えるだけなのだろう)。こまやかなる匂ひなど(細やかな心遣いは)、うちとけて*見まほしく(親しむほど好ましく)、なかなかなる心地す(却ってこの女君のほうが増さって思える)。*「限りなくいつき据ゑたらむ姫宮」は、六条院で手厚く護られている姉の女一の宮、らしい。*「思ひなしの～ぞかし」は<思い込みで～に見えるだけだろう>という疑念または半反語表現構文、かと思う。*「わが方さま」は<身内の方=女一の宮>。*「見まほし」の「まほし」は<～むと欲し=～であってほしい=～したい>という助動詞であり、そうなることが<願わしい、望ましい→理想的だ、好ましい>という形容詞でもあり、此处では後者だろう。

水の音なひなつかしからず(しかし宇治川の早瀬の水音は激しく)、宇治橋のいとも古りて見えわたさるるなど(宇治橋がとても古びて見渡されるなど)、霧晴れゆけば、いとど荒ましき岸のわたりを(霧が晴れて行くと大変に荒々しい岸辺に)、かかる所に、いかで年を経たまふらむ(このような場所で姫はどんなに心寂しく年を経ていらしゃったのだろう)」など、うち涙ぐみたまへるを(などと匂宮がふと涙ぐまれるのを)、いと恥づかしと聞きたまふ(妹君はとても負い目にお聞きになります)。

男の御さまの(夫としてみる兵部卿宮の御姿が)、限りなくなまめかしくきよらにて(このうえなく優雅で美しく)、この世のみならず契り頼めきこえたまへば(三日通いをなさって、一夜限りではない夫婦縁を約束申しなさるので)、「思ひ寄らざりしこととは思ひながら(思っても見なかった突然の闖入ではあったが)、なかなか、かの目馴れたりし中納言の恥づかしさよりは(却って既に見知っていた中納言の取り澄ましよりは、親しみが持てる)」とおぼえたまふ(と妹姫は思いなさいます)。

「かれは思ふ方異にて(あの人は意中の人私ではなく)、いといたく澄みたるけしきの(もうまったく動じない姿勢が)、見えにくく恥づかしげなりしに(会うにも気詰まりになっていたが)、よそに思ひきこえしは(この宮は余所余所しく思い申ししていた時は)、ましてこよなくはるかに(もっと遠い人で)、一行書き出でたまふ御返り事だに(短くお書きになったお手紙の御返事できえ)、つつましくおぼえしを(気が引けたものを)、久しく途絶えたまはむは(今では暫くお見えにならないと)、心細からむ(心細くなりそうだ)」

と思ひならるるも(という気持ちになるのも)、我ながらうたて(出家を考えていた身としては、我ながらはしたない)、と思ひ知りたまふ(と妹君はお気づきになります)。

[第五段 匂宮と中の君和歌を詠み交して別れる]

人びといたく声づくり催しきこゆれば(供人が何度も咳払いをして出立を急かせ申すので)、京におはしまさむほど、はしたなからぬほどにと(京にお着きになる時分が人目に付かぬようにと)、いと心あわたたしげにて(匂宮はとても気忙に)、心より外ならむ夜がれを(心ならずも来られない夜があることを)、返す返すのたまふ(姫に返す返す仰います)。

「中絶えむものならなくに、橋姫の片敷く袖や夜半に濡らさむ」(和歌 47-14)

「絶えずとも 片敷く宇治の 橋姫よ」(意識 47-14)

*注は誤植でもあるのか、不成文なので推定だが匂宮から中君への贈歌。「橋姫」に中君を譬える。『花鳥余情』は「忘らるる身を宇治橋の中絶えて人も通はぬ年ぞ経にける」(古今集恋五、八二五、読人しらず)、「さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」(古今集恋四、六八九、読人しらず)、を指摘。>とある、らしい。「中絶ゆ」は途中まで進んだ話が中断する>ということ、らしい。「橋の中絶ゆ」は橋が途中で壊れ落ちて往来が出来なくなる>ということのようだ。決壊した宇治橋が何年も修復されなかったことがあったらしく、その事情が「宇治橋の中絶えて人も通はぬ年ぞ経にける」という言い方に説得力を持たせているのだろう。其処に「忘らるる身を憂し(忘れられる身が悲しい)」と洒落掛けていて、825番の歌は深刻な悲しみよりも実らずに終わった淡い恋の懐かしさが漂う印象だ。689番の歌がどういう事情を下敷きしているのかは分からないが、幾晩も女を待たせて寂しく一人寝をさせている色男を背負った詠みっぷりからして、冗談口調の遊び歌に聞こえるので、面白く解釈してみたい。「さむしろ」は「狭筵」で狭い居場所だから、是は多分、宇治橋の三の間だ。三の間は西詰から三つ目の注間に設けられていて、上流側だけにあるから「片袖」に見立てられそうだ。「ころも片敷く」も「袖片敷く」も、男女が互いの着物の袖を敷き合って共寝したことから、「片敷く」は独り寝の寂しさ>を言う、とのことで、都男が山科方面の女に惚れられているが、なかなか会いに行けないと惚気ている、という歌筋だ。ただし、本気で惚気ていると言うよりは、この言い回し自体の洒落っ気を楽しんでいるように感じられる。「まつらむ」には<祀る>も掛かっている、かつては三の間に橋姫が祀られていたという事情を踏まえているから、洒落が利いているのだろう。

出でがてに(匂宮はこう贈歌なさり、帰り難そうに)、立ち返りつつやすらひたまふ(何度も振り返って立ち止まりなさいます)。

「絶えせじのわが頼みにや、宇治橋の遥けきなかを待ちわたるべき」(和歌 47-15)

「絶えないと 願う宇治橋 遠くまで」(意識 47-15)

*注に<中君の返歌。「絶え」「橋」の語句を受け、「や—濡らさむ」を「や—待ちわたるべき」と返す。贈答歌。>とある。「遥けきなかを待ちわたる」は<長い期間でも待ち続ける>。また、橋だけに<遠い地点の通いを期待して渡る>。切実な「頼み」のようでも、洒落てる分だけ軽い。

言には出でねど(健気にこう返歌なさった姫君が、言葉には出さないが)、もの嘆かしき御けはひは(男君の暫くお見えになれないことを悲しむ御様子は)、限りなく思されけり(匂宮にはとても辛く思われなさいました)。

若き人の御心にしみぬべく(若い女房の心に染みそうな)、たぐひすくなげなる朝けの御姿を見送りて(類稀なほど優美な明け方に浮かぶ兵部卿宮の御姿を見送って)、名残とまれる御移り香なども(名残りが漂い残る御移り香なども)、人知れずものあはれなるは(内心で愛しく思うのは)、*されたる御心かな(世慣れた姫の実感のようです)。*「されたる」は<あかぬけしている。風流だ。しゃれている。>と古語辞典にある。「さる」は「曝る」と表記され<曝す。曝される。>ということで、それが<使い古されて練れた風情を呈す>という言い方にもなるらしい。注には<『細流抄』は「草子地也」と指摘。『全集』は「語り手の諧謔的なほめことば」。『集成』は「(中の君も)隅に置けないお方だこと。男女の間の情にすでに目覚めていることをいう。草子地」と注す。>とある。

今朝ぞ(今朝は三日通いを果たした翌日なので)、ものあやめ見ゆるほどにて(公然と結婚が成立が示されたことから)、人びと覗きて見たてまつる(女房たちも匂宮のお帰りに臨んで玄関先でお見送り申し上げます)。

「中納言殿は、なつかしく(中納言殿は馴染みがあって)恥づかしげなるさまぞ、添ひたまへりける(立派な風体を備えていらっしゃるが)、*思ひなしの(皇子と思う所為か)、今ひと際にや、この御さまは、いとことに(今一段と兵部卿宮の御身は格別でいらっしゃる)」*「思ひなしの」は注に<皇族と思うせいか。>とある。

など、めできこゆ(などとお褒め申します)。

道すがら(京への帰り道で)、心苦しかりつる御けしきを思し出でつつ(匂宮は宇治姫の途絶えを悲しむ御姿を思い出しなさりつつ)、立ちも返りなまほしく(途中で引き返したいと)、さま悪しきまで思せど(見苦しいほどお思いになったが)、世の聞こえを忍びて帰らせたまふほどに(皇子の立場を顧みて自制してお帰りになったので)、えたはやすくも紛れさせたまはず(その後はやはり容易には宇治へお出掛けなされません)。

御文は明るる日ごとに、あまた返りづつたてまつらせたまふ(匂宮は宇治姫に御手紙を毎日毎日重ね重ね差し上げなさいます)。「おろかにはあらぬにや(軽んじてはいらっしゃらないようだ)」と思ひながら(と思いながらも)、おぼつかなき日数の積もるを(お通いの無い日が積もるのを)、「いと心尽くしに見じと思ひしものを(あまり心配しないで置こうと思っていたが)、身にまさりて心苦しくもあるかな(自分のこと以上に気が揉めることだ)」と、*姫宮は思し嘆かるれど(と姉君は思い嘆きなされるが)、いとどこの君の思ひ沈みたまはむにより(そのように自分が

不安がっては、いっそう妹君が思い沈みなさるので、つれなくもてなして(平静を装って)、「みづからだに(この上自分の事まで)、なほかかること思ひ加へじ(さらにこのような結婚話を思い加えることはしないでおこう)」と、いよいよ深く思す(とますます中納言との絶縁を深くお思いになります)。
*「姫宮」は<姉君>を言う、らしい。

中納言の君も(中納言の薫君も)、「待ち遠にぞ思すらむかし(妹君は匂宮の来訪を心待ちにしていच्छるだろう)」と思ひやりて(と思ひ遣って)、我があやまちにいとほしくて(自分が手引きした責任感から)、宮を聞こえおどろかしつつ(匂宮に再訪を促しては)、絶えず御けしきを見たまふに(絶えず御様子を伺いなさるが)、いといたく思ほし入れたるさまなれば(それはとても宇治姫を思い込んでいच्छるようなので)、さりとも(お出掛けは無いものの)、うしろやすかりけり(心離れはないものと安心できました)。

[第六段 九月十日、薫と匂宮、宇治へ行く]

*九月十日のほどなれば(九月十日の宇治では晩秋の寂寥感が深まる頃なので)、野山のけしきも思ひやらるるに(山荘を取り囲む野山の景色がどんなに厳しいかと思ひ遣られて)、時雨めきてかきくらし、空のむら雲恐ろしげなる夕暮(時雨もよう空が搔き曇り雲が暗く被う夕暮れに)、宮いとど静心なく眺めたまひて(匂宮はいっそう落ち着かない気分で宇治姫が慕われて)、いかにせむと(どうしたものかと)、御心一つを出で立ちかねたまふ折推し量りて(御自分ひとりではお出掛けを決めかねていच्छる頃だろうと察して)、参りたまへり(薫君が参上なさいました)。
*「くぐわちとほかのほど」は注に<宇治では晩秋の寂寥感の深まるころ。>とある。

「*ふるの山里いかならむ(縁深い宇治山荘はどうお暮らしでしょう)」と、おどろかしきこえたまふ(と薫君は匂宮にお出掛けをお勧め申しなさいます)。いとうれしと思ひて(匂宮はとても嬉しくお思いになって)、もろともに誘ひたまへば(同道を誘いなさるので)、例の(以前と同じように)、一つ御車にておはす(宮の御車に中納言は同車してお出掛けなさいます)。
*「ふる」は「触る」で<触れ合う→関係する→男女の仲になる>という言い方らしく、「ふるの山里」で<縁を結んだ宇治山荘>と言っている事になるのだろう。ただ、「ふる」は「振る(見限る)」でもあり、匂宮の途絶えを非難気味にからかっているようでもあり、「古」なら<古式ゆかしい王家筋>とか<古めかしい趣き>とかいう響きもあるのかも知れない。

分け入りたまふままにぞ(山路を深く分け入りなさるにつれて晩秋の寂しさが身に沁みて)、まいて眺めたまふらむ心のうち(匂宮は自分以上に不安に御思ひであらう宇治姫のお気持ちを)、いとど推し量られたまふ(いっそう強く察しなさいます)。道のほども(道中も)、ただこのことの心苦しきを語らひきこえたまふ(ただこの事の心苦しさを薫君と語り合いなさいます)。

たそかれ時のいみじく心細げなるに(たそかれ時の非常に心細くなる中で)、雨は冷やかにうちそそきて(雨が冷たく降り注いで)、秋果つるけしきのすごきに(秋が終わる景色の厳しさに)、うちしめり濡れたまへる匂ひどもは(しつとりと潤っていच्छる御二人の芳香は)、世のものに似ず艶にて(この世のものとは思えないほど優雅で)、うち連れたまへるを(そのお二人が連れ立っていच्छるのを)、山賤どもは、いかが心惑ひもせざらむ(村人たちはどうして当惑しないて居られましようか)。

女ばら(女房たちは)、日ごろうちつぶやきつる、名残なく笑みさかえつつ(日頃は匂宮の不参に不平を言っていたことの跡形もなく満面の笑みで)、御座ひきつくろひなどす(御控部屋を整えます)。京に(女房たちは八宮亡き後は、京の)、さるべき所々に行き散りたる娘ども、姪だつ人、二、三人(縁あるところに散り散りに奉公に行っていた娘や姪などの二人や三人を)尋ね寄せて参らせたり(呼び寄せて妹姫の御世話に仕えさせていました)。年ごろあなづりきこえける心浅き人びと(年来八宮邸を力の無い没落家と侮り申ししていた王家血筋の尊さを知らないそうした若い女房たちは)、めづらかなる客人と思ひ驚きたり(皇子である匂宮の今をときめく艶姿を山里には意外な客人と思ひ驚きました)。

姫宮も、折うれしく思ひきこえたまふに(姉君もこの兵部卿宮のお出ましを喜ばしく思い申しなさるが)、さかしら人の添ひたまへるぞ(差し出がましい中納言殿が付き添っていらっしゃるのが)、恥づかしくもありぬべく(緊張を強いられて)、なまわづらはしく思へど(今さらは面倒に思うが)、心ばへののどかにももの深くものしたまふを(気性がゆったりと落ち着いて慎重でいらっしゃるのを)、「げに、人はかくはおはせざりけり(なるほど、兵部卿宮はこう悠然とはしていらっしゃらない)」と見あはせたまふに(と見比べなされると)、*ありがたしと思ひ知る(自分ばかりか妹にも手出しなさらなかった中納言を、珍しい男なのだと思ひ知られます)。*「ありがたし」には<尊い厚意に感謝する>という意味もあるが、姉君は深層では力づくで自分を女にしなかった中納言を恨んでいるので、この「ありがたし」は文字通りの<滅多にない珍しさ>を言うのだろう。で、薫君が自分ばかりか妹にも手出ししなかった事で、自分が女の魅力に欠けていたという屈辱を、男の方が変人だったと思える事で、幾らかは緩和できたのかも知れない。

[第七段 薫、大君に対面、実事なく朝を迎える]

宮を、所につけては(匂宮を婿殿に相応しく)、いとことにかしづき入れたてまつりて(とても丁重に迎え入れ申し上げて)、この君は(薫君は)、主人方あるじがたに心やすくもてなしたまふものから(主人気取りで気楽に振舞いなさるものの)、まだ客人居まらうとゐのかりそめなる方に出だし放ちたまへれば(姉君はまだ客人用の間に合わせの部屋に中納言を遠ざけていらっしゃるので)、いとからしと思ひたまへり(薫中納言はとても辛いとお思いでした)。

怨みたまふもさすがにいとほしくて(嘆きなさるのをそのまま放ってはお気の毒なので)、物越に対面したまふ(姉君は物越しに中納言と対面なさいます)。「*戯れにくくもあるかな(あまりに無粋な)。かくてのみや(これしきの応対とは)」と、いみじく怨みきこえたまふ(と中納言は非常に不平を申しなさいます)。*「たはぶれにくし」は<洒落にならない=あまりに情趣に欠ける>。

やうやうことわり知りたまひにたれど(姉君は次第に中納言の言い分を分かって来ていらっしゃったが)、人の御上にても(妹君の御事情にしても)、ものをいみじく思ひ沈みたまひて(兵部卿宮が途絶えがちなのを非常に憂慮なさって)、いとどかかる方を憂きものに思ひ果てて(ますます結婚話を面倒なものとして決め付けて)、

「なほ、ひたぶるに(もう決して)、いかでかくうちとけじ(これ以上は気を許すまい)。あはれと思ふ人の御心も(有難く思う中納言の御好意も)、かならずつらしと思ひぬべきわざにこそあめ

れ(必ず辛いと思われる事があるに違いない)。我も人も*見おとさず(自分も相手も幻滅する前に)、心違はでやみにしがな(本気にならずに終わりにしたい) *「見おとす」は<見劣りする→幻滅する>という言い方らしい。

と思ふ心づかひ深くしたまへり(という考えを深くなさっていました)。

*宮の御ありさまなども問ひきこえたまへば(中納言は姉君に、妹君の御様子を尋ね申しなさると)、かすめつつ(姉君はそれとなく)、「さればよ(やはり匂宮の不参を気に病んでいらっしやるらしい)」とおぼしくのたまへば(と思われるように仰るので)、いとほしくて(お気の毒なので)、思したる御さま(兵部卿宮が妹君をお思いの御姿)、けしきを見ありくやうなど(その様子を自分が探っていることなどを)、語りきこえたまふ(お話し申しなさいます)。 *「宮」とは誰か。多くの場合は<匂兵部卿宮>を指すが、此处では<中の宮=妹君>を指す、と読まない、私には文意が通らない。が、だとしたら、何でこんな紛らわしい語用をするのか、本当に作者の気が知れない。

例よりは心うつくしく語らひて(その中納言の話に、姉君はいつもよりは親しげに応じて)、

「なほ、かくもの思ひ加ふるほど(今はまだこのように妹の様子などに懸念が増していますので)、すこし心地も静まりて聞こえむ(お二人が気持ちを確かめなさって、私ももう少し気分が落ち着いてから、またお話し申します)」

とのたまふ(と仰います)。

「人憎く気遠くは(姉君は憎らしいほど余所余所しくは)、もて離れぬものから(遠ざけないものの)、障子の固めもいと強し(襖戸の施錠はしっかり下ろされている)。しひて破らむをば(私が無理に戸を壊すのは)、つらくいみじからむ(情けなく乱暴な遣り方だ)と*思したれば(と姫は慎ましくお思いなのだから)、思さるるやうこそはあらめ(お考えのように私も自制しよう)。軽々しく異ざまになびきたまふこと(そのように身持ちの固い姫が、軽々しく他の男に付き従いなさることは)、はた、世にあらじ(また有り得ないだろう)」と、*心のどかなる人は(と気性の穏やかな中納言は)、さいへど(姫の頑なさを不満に思うものの)、いとよく思ひ静めたまふ(実によくも我慢なさいました)。 *「思したれば」は注に<『集成』は「大君が」。『完訳』は、主語を薰として訳す。>とある。渋谷校訂は『完訳』説に則っているようで、「思さるるやうこそはあらめ」を<姉姫には何かお考えがあるのだろう>と訳してあるが、そういう解釈では私には全体が意味不明の文意となるので、私は『集成』説に従う。 *「心のどかなる人」は六段で姉君が中納言を「心ばへののどかにももの深くものしたまふ」と評していたことを受けた揶揄口調なのだろう。

「ただ、いとおぼつかなく(とにかくととてももどかしく)、もの隔てたるなむ、胸あかぬ心地するを(物を隔てての対面では物足りない)、ありしやうにて聞こえむ(以前のように直にお話し申したい)」

とせめたまへど(と薰君は姫にせがみなさるが)、

「常よりも*わが面影に恥づるころなれば(いつもよりも顔がやつれて恥ずかしく)、疎ましと見たまひてむも(見苦しいと思われるのも)、さすがに苦しきは(やはり辛いので)、いかなるにか(どうしてお会い出来ましょう)」 *「わが面影に恥づるころなれば」は注に<『源氏積』は「夢にだに見ゆとは見えじ朝な朝な我が面影に恥づる身なれば」(古今集恋四、六八一、伊勢)を指摘。>とある。「面影に恥づる」は<恋心にやつれて会わず顔がない>という言い回しのようで、姫は中納言に気を持たせる思わせぶりな言い方をした事になるようだ。ただの愛想に過ぎないのだろうが、それを求めている相手には誤解を誘う対応だ。

と(と姉君が)、ほのかにうち笑ひたまへるけはひなど(軽く愛想笑いをなさった気配など)、あやしくなつかしくおぼゆ(薫君は妙に親しみを覚えます)。

「かかる御心にたゆめられたてまつりて(こうした姫の絆し心に騙され申して)、つひにいかなるべき身にか(私は遂にはどうなる身なのだろうか)」

と嘆きがちにて(と薫君は嘆きがちに)、例の、*遠山鳥にて明けぬ(いつものように遠山鳥の独り寝で夜を明かします)。 *「とほやまどり」は<ヤマドリの別名。雌雄が山を隔てて寝るところから、男女が別々に夜を過ごす意にかけて用いる。>と大辞泉にある。

宮は、まだ旅寝なるらむとも思さで(匂宮は薫君がまだ独りで旅寝しているともご存じなく)、

「中納言の、主人方に心のどかなるけしきこそうらやましけれ(中納言が主人気取りで気ままにしている様子が羨ましい)」

とのたまへば(と仰ると)、女君、あやしと聞きたまふ(妻の妹君は姉君が中納言に打ち解けないのを知っているので、変な話だとお聞きになります)。

[第八段 匂宮、中の君を重んじる]

*わりなくしておはしまして(やっと久しぶりに御見えになって)、ほどなく帰りたまふが(直ぐにお帰りになるのが)、飽かず苦しきに(物足りなく辛いので)、宮ものをいみじく思したり(匂宮は事情や立場の難しさをお思いでした)。 *「わりなし」は<道理が立たない。無理だ。難儀だ。>あたりが主な意味で、そこから<だめだ、つらい、困る、やむをえない、ただならない>みたいな言い方にもなるようだ。訳文には「わりなくて」を<無理を押し>とあり、そういう言い方もできる事情かとは思いますが、この「わりなし」の語感には<無理をする>意志の強さよりは<難儀さ→やっと何とか>という切実さが強い。

御心のうちを知りたまはねば(その匂宮のお気持ちを分らないので)、女方には(女君の方は)、「またいかならむ(次は何時になるのだろう)。人笑へにや(夜離れだと物笑いになるのではないか)」と思ひ嘆きたまへば(と思ひ嘆きなさるので)、「げに、心尽くしに苦しげなるわざかな(本当に心底から苦しそうだ)」と見ゆ(と見えます)。

京にも、隠ろへて*渡りたまふべき所もさすがになし(京にも女君が密かにお移りになれる家は、匂宮は宇治では遠くて通い切れないとは言ふものの、無いのです)。 *「渡りたまふ」の主語は妹君、と注にある。「さすがになし」は物理的に<無い>ということではなく、事情があつて<用意出来ない>という言い

方だろうが、この時点ではその詳しい事情はまだ語られておらず、ともかくは気持ちはあるものの出来ないので無い>としか言い換えようも無い。また注には、この文意について『完訳』は「彼女が隠し妻でしかない点に注意」と注す。>とある。没落王家の親も有力な後見人もいない姫であってみれば、正妻の地位に就けなくても、高家に妻の一人として迎え入れられて暮らしが立てば面目は立つだろうが、それさえもなかなか儘ならない、みたいな事情が以下に語られるようだ。

六条の院には(六条院には)、*左の大殿(左大臣の源殿が)、*片つ方には住みたまひて(一画の夏の町に住んでいらっしゃって)、さばかりいかで(そうした縁組がどうにか成れば良い)と思したる*六の君の御ことを思しよらぬに(とお考えの六姫のことを匂宮が興味をお持ちにならないので)、なま恨めしと思ひきこえたまふべかめり(何とも御不興に思い申しなさっていたようで)、好き好きしき御さまと(匂宮の宇治通いを風流遊びが過ぎると)、許しなくそしりきこえたまひて(容赦なく非難申しなさって)、*内裏わたりにも愁へきこえたまふべかめれば(父帝に於かれても御懸念あそばしていらっしゃるようなので)、いよいよ、おぼえなくて(ますます風向きが悪く)出だし据ゑたまはむも(評判も実勢もない宇治姫を、妻として公然と押し出して据えなせるのも)、憚ることいと多かり(出来難い事情が実に多いのでした)。 *「ひだりのおほいどの」と源殿は左大臣とされている。 *「かたつかた」は<一画>だが、具体的には夏の町に一晩置きに泊まっているかと思われ、それは今から10年程前の事になるが匂兵部卿巻一章三段に「丑寅の町に(夏の東町に)、かの一条の宮を渡したてまつりたまひてなむ(あの夕霧以来の一条宮にお移り頂きなさって)、三条殿と(三条邸の妻と)、*夜ごとに十五日づつ(一晩置きに月に十五日づつ)、うるはしう通ひ住みたまひける(律儀に通い分けて住んでいらっしゃったのです)」という記事があった事に拠る。この十年間、源殿は律儀にそういう生活を繰り返しているようだ。ざっと、源殿50歳、三条殿52歳、一条宮47歳(推)、あたり。 *「六の君」については、今のところ年齢に触れられていないかと思うが、匂宮が25歳、薫君が24歳で、そのいずれかに嫁がせたいと源殿が考えていたのだから22~27歳くらいかと推量される。また、この六姫は一条宮に預けられていて、匂兵部卿巻二章六段に「やむごとなきよりも(尊家の藤原姫である正妻腹の娘御たちよりも)、典侍腹の六の君とか(冷泉帝の典侍であった藤原傍家筋の妾腹の六女とかが)、いとすぐれてをかしげに(とても抜き出て美しく)、心ばへなどもたらひて生ひ出でたまふを(気立ても申し分なく成長なされたのを)、世のおぼえのおとしめざまなるべきしも(母親の家柄の違いで世間から低く見られがちなのが)、かくあたらしきを(実に惜しいので)、心苦しう思して(残念にお思いになって)、一条の宮の(一条宮が)、さる扱ひぐさ持たまへらでさうざうしきに(子供を儲けなさらず寂しくしているので)、迎へとりてたてまつりたまへり(源殿は典侍からその六女を引き取って一条宮に御養女として家格を得るべく差し上げなされたのです)」とあった。 *「うちわたりにも」は注に<匂宮の父帝は母明石中宮に対して。>とある。

なべてに思す人の際は、宮仕への筋にて、なかなか心やすげなり(普通にお思いの身分の女は女房として宮仕えさせる方法があるので却って扱いは簡単でした)。 *この文意は、注に<『集成』は「並々にお思いの女だったら、宮仕えさせるといったことで、かえって扱いやすい。中宮などに仕えさせておく方法がある」。『完訳』は「表向きは女房という形。いわゆる召人。気安く逢えて、しかも世間から非難も受けない形である」と注す。>とある。全くの常識として簡単に語られているが、この召人制度は実質で身分制度の維持運用に相当に重要な役割を果たしていて、実際にも多くの人間模様を呈していたに違はなく、王朝物語であれば此処に多くは語られないが、それでも末摘花巻の大輔の命婦譚の圧巻は印象深い。

さやうの並々には思されず(匂宮は宇治姫を左様の並々の身分の女とはお思いにならず)、「もし世の中移りて(もし御世代わりして、皇太子の兄宮が即位なさり)、*帝後の思しおきつるまま

にもおはしまさば(父帝と母后がお考えのように私が立太子できたら)、*人より高きさまにこそなさま(宇治姫を立后させたい)」など、ただ今は(などと現在は)、いとほなやかに、心にかかりたまへるまゝに(とても晴れがましく思い入れていらっしゃったが)、もてなさむ方なく苦しかりけり(思うように姫をもてなす方法がなく辛いのでした)。*「帝后の思しおきつるまゝ」は注に<帝と中宮は匂宮を将来の東宮にと考えている。>とある。だから、皇子たちの中でも殊更に匂宮に厳しく素行を注意した、ということらしい。が、そうした事情を藤原氏を初めとした諸勢力の動向から説明しないと説得力が薄く、そうした説明は今まで無かった。私は不満だ。*「人より高きさま」は他の妻よりも高い地位=正妻だろうし、皇太子であったなら立后させることになるのだろう。此処の文意は注釈無しには全く分からなかった。

中納言は、三条の宮造り果てて(薫中納言は焼失した三条宮邸を建て直し終えて)、「さるべきさまにて渡したてまつらむ(其処に宇治姉君のお部屋を用意してお移し申上げよう)」と思す(とお思いになります)。

「げに(事程左様に)、ただ人は心やすかりけり(臣下身分の私は気楽なものだ)。かくいと心苦しき御けしきながら(匂宮はこのようにとても困難な事情ながら)、やすからず忍びたまふからに(辛い思いで耐えていらっしゃって)、かたみに思ひ悩みたまへるめるも(妹君と互いに先々どうしたものかと思ひ悩んでいらっしゃるらしいのも)、心苦しくて(お気の毒なので)、忍びてかく通ひたまふよしを(三の宮がこのように真剣に宇治姫を思ってお通いなさっていることを)、中宮などにも漏らし聞こし召させて(中宮などにもじっくりお話し申し上げて)、しばしの御騒がれはいとほしくとも(少し騒ぎになるのは止むを得ないが)、女方の御ためは(正式に御二人の仲をお認め頂くのが、妹君にとっては)、咎もあらじ(最善だろう)。いとかく夜をだに明かしたまはぬ苦しげさよ(とにかく夜もお休みになれなさらないほどの大変さだ)。いみじくもてなしてあらせたまつらばや(せいぜい私が上手く取り計らって良い形にして差し上げないと)」

など思ひて(などと薫君は考えて)、あながちにも隠ろへず(特には宇治姉君を迎え申す準備を隠し立てしません)。

「更衣など(ころもがへなど、宇治山荘での冬の衣替えなどの衣装を)、はかばかしく誰れかは扱ふらむ(私以外の誰が要領良く揃えるだろうか)」など思ひて(などとお思いになって)、御帳の帷(みちやうのかたびら、御帳台の垂れ幕や)、壁代など(かべしろなど、仕切りの飾り布などを)、三条の宮造り果てて(三条宮邸を造り終えて)、渡りたまはむ心まうけに(引越しなされる準備に)、しおかせたまへるを(取り掛かせなさいましたのを)、「*まづ、さるべき用なむ(先に片付ける用事があります)」など、いと忍びて聞こえたまひて(などと入道母宮にこっそりお断り申しなさって)、たてまつれたまふ(お送り申しなさいます)。さまざまなる女房の装束(山里風から都風に整えるべく趣を変えた、さまざまな女房の衣装類を)、御乳母などにも*のたまひつつ(御乳母などにも相談しつつ)、わざともせさせたまひけり(わざわざ仕立てさせなさいましたのです)。*「まづさるべき用なむ」は注に<薫の詞。母女三の宮に申し上げた内容。>とある。「いと忍びて聞こえたまひて」と敬語遣いがあるので、女房を其方の用に差し向けることを入道母宮に断ったのだろう。ただ、「忍びて」というのを「あながちにも隠ろへず」とは無関係に、その場の仕種としての軽妙さの描写なのだろうと読んで置くが、何か別の意図が有るのかどうか、私には分からない。*「のたまひつつ」は注に<相談して、の意。>とある。